

# 「吉田松陰の教育論」



三宅 紹宣みやけ しょうけん (広島大学名誉教授)

一九四九年広島県生まれ。著書『幕末・維新时期長州藩の政治構造』(校倉書房)、『幕末戦争』『幕末維新の政治過程』(吉川弘文館)ほか多数。

はじめに

吉田松陰の教育論については、「松下村塾記」をその教育理想を掲げたものとして高く評価することが、つとに定着している。

「松下村塾記」では、「学は、人たる所以を学ぶなり」という教育理念を述べるとともに、三科六等のカリキュラムを計画している。しかし一方で、松陰は、「諸生に示す」において、規則を簡略にして、心の通い合う教育を目指すということを、塾生達に示している。どちらが松下村塾の実像なのであろうか。

ここでは、「諸生に示す」と「松下村塾記」を比較し、松陰の教育論とはどのようなものであったかを解明したい。その上で、「学校を議す 附作場」を分析することにより、松陰の工学教育論について触れ、その通底する教育論について総合的に明らかにしたい。

## 一 「諸生に示す」

まず、「諸生に示す」について、松陰自筆の原文を掲げ、次にその訓読、さらに大意について明らかにしたい。

(原文 吉田松陰自筆 「戊午幽室文稿」在中 萩松陰神社蔵)

示諸生

村塾寛略礼法、擺落規則、非以学禽獸夷狄也、非以慕老莊竹林也、特以今世礼法未造、流爲虚偽刻薄、欲誠朴忠実以矯揉之已、新塾之初設、諸生皆率此道、以相交、疾病艱難相扶持、力役事故相勞役、如手足然、如骨肉然、増塾之役、不多煩工匠、乃能有成、職是之由、吾嘗訪大和谷翁三山、三山曰、吾以充耳講學吠畝、所喜者、諸生相親愛、如兄弟骨肉然、囚學教事誦之、余時歎羨不已、謂亦有德之言也、數爲諸生道之、諸生幸深諒此意、久次相授、雖広川之門、無以加也、因謂是不難矣、又嘗讀王陽明年譜、謂、其警発門人、多於山水泉石間、竊服其理矣、吾

非陽明也、然朋友切磋、亦當如斯、是以會講連業、未嘗設繩墨、交以諧謔滑稽、如匡稚圭說詩故事、如近春米鋤圃之舉、亦寓此意耳、至擊劍踏水二事、武技之最切要者、時方盛夏、邊警又殷、不可一日弛、然徒視為遊戲、不尚實用、消光陰、荒學業、亦可慮也、要之學之爲功、氣類先接、義理從融、非區々礼法規則所能及也、<sup>(1)</sup>學者無所自得、呶々多言、是聖賢之所戒、而偶有一得、沈默自護、余甚醜之、凡讀書何心、非欲以有爲乎、書古也、爲今也、今與古不同、爲與書、何能一一相符、不符不同、疑難交生、開悟時有、乃同友相質、寧得已哉、然則沈默自護者、非無自得可語、則以人爲不足語矣、吾志則不然、已無可語則已、苟有可語、雖牛夫馬卒、將與語之、況同友乎、諸生來村塾者、要皆有志之士、又能卓立俗流、吾無憾焉、然意偶有所感、故聊言之、六月廿三日、二十一回生書、

## (訓読)

「諸生に示す」(安政五年六月二十三日)

村塾、礼法を寛略し、規則を擺落するも、以て禽獸夷狄を学ぶに非ず。以て、老荘竹林を慕ふに非ざるなり。特だ今世礼法の未造、流れて虚偽刻薄となれるを以て、誠朴忠実以て之れを矯揉せんと欲するのみ。

新塾の初めて設けらるるや、諸生皆此の道に率ひて以て相交はり、疾病艱難に相扶持し、力役事故には相労役すること、手足の

如く然り、骨肉の如く然り。増塾の役、多くは工匠を煩はさずして、乃ち能く成ることあるは、職として是れに之れ由る。

吾れ嘗て大和の谷翁三山を訪ふ。<sup>(2)</sup>三山曰く、「吾れ充耳を以て学を吠畝に講ず、喜ぶ所は諸生相親愛すること、兄弟骨肉の如く然り」と。因つて教事を挙げて之れを誦ふ。余、時に歎羨已まず、謂へらく亦有徳の言なりと。数々諸生の爲めに之れを道ふ。諸生幸に深く此の意を諒し、久次相授ふ。広川の門と雖も以て加ふるなし。因つて謂へらく是れ難からずと。

又嘗て王陽明<sup>(3)</sup>の年譜を読む。謂へらく、其の門人を警発するや、多く山水泉石の間に於いてすと。竊かに其の理に服せり。吾れは陽明に非ざるなり。然れども朋友の切磋亦当に斯くの如くなるべし。

ここを以て会講連業、未だ嘗て繩墨を設けず、交ふるに諧謔滑稽を以てすること、匡稚圭<sup>(4)</sup>が詩を説くのご故事の如し。近くは米を舂き圃を鋤くの挙の如き、亦此の意を寓するのみ。

擊劍・踏水の二事に至りては、武技の最も切要なるもの、時方に盛夏、辺警又殷んにして、一日も弛うすべからず。然れども徒らに視て遊戯と爲し、実用を尚はず、光陰を消し、学業を荒るも、又慮るべきなり。

之れを要するに学の功たる、氣類先づ接し義理從つて融る。区々たる礼法規則の能く及ぶ所に非ざるなり。学者自得する所なくして、呶々多言するは、是れ聖賢の戒むる所なり。而れども偶々

一得ありて、沈黙自ら護るは、余甚だ之れを醜む。

凡そ読書は何の心ぞや、以て為すあらんと欲するに非ずや。書は古なり、為は今なり。今と古と同じからず。為と書と何ぞ能く一々相符せん。符せず同じからざれば、疑難交々生ぜん。悔悟時あり、乃ち同友相質すこと、寧んぞ已むを得んや。

然らば則ち沈黙自ら護る者は、自得語るべきものなきに非ずんば、則ち人を以て語るに足らずと為すなり。吾が志は則ち然らず。已に語るものなくんば則ち已むも、苟も語るべきものあらば、牛夫馬卒と雖も、將に与に之れを語らんとす。況んや同友をや。諸生村塾に来る者、要は皆有志の士、又能く俗流に卓立す、吾れ憾みなし。然れども意偶々感ずる所あり。故に聊か之れを言ふ。六月二十三日、二十一回生書す。

〔参考〕『戊午幽室文稿』所収『吉田松陰全集』第四卷、大和書房、一九七二年、三五七～三五九頁〕

〔大意〕

〔諸生に示す〕

① 松下村塾では、礼儀作法を簡略にし、形式的な規則をつくらないようになっている。これは、鳥や獣あるいは野蛮人のまねをしようというのでもなければ、自然に生きることを理想とした中国古代の老子・莊子や、世俗を避けて清い話をすることを理想とした竹林の七賢（竹林に住んだ七人の賢者）などを慕

ったものではない。

ただ、いま世の礼法が末期となり、流れてうそいつわりに満ち、残酷で薄情なものになっているから、誠意と純朴によってこれをなおしたいと考えているのみなのである。

② 安政四年（一八五七）十一月、八畳一室の松下村塾がはじめてつくられてから、諸君はみなこの方針のもとで互いに交わり、だれかが病気をし、困ったりしているときには互いに助けあい、力仕事やなにか事が起こった際には、それぞれ手伝いあったものだ。それはまさにお互いが自分の手足のようであり、家族同様だったのである。

だから、安政五年三月の松下村塾の増築のときには、ほとんどは大工の手を煩わすことなく出来上がったのだ。塾生がそれぞれ自分の仕事として協力したからである。

③ 僕（松陰）はかつて大和の谷三山（たにさんざん尊王攘夷を説いた）翁を訪ねたことがある。そのとき三山は言った、「私は耳が聞こえないが、学問を田園で講じている。私にとつてうれしいことは、門人たちがお互いに親愛しあい、兄弟や肉親のように仲よくしていることだ」と。そして、そのいくつかの例を挙げて説明した。

僕はそれを聞いて実にくらやましかった。そして、心中「これは徳ある人の言葉だ」と思った。諸君にはたびたびこのことはいったことがある。

諸君もまた僕のその意のあるところを深く納得し、次々に伝えた。

それはあの中国の董仲舒とうちゅうじよ（前漢の儒学者）の門下といえどもこれに及ばないほどなのである。そこで僕は考えた。これはやろうとすれば決してできないことではないのだ、と。

④ また、かつて王陽明の年譜を読んだことがある。そのとき思ったものだ。その門人を教え導くのは、多くは山とか川などの自然の環境の中においてなのだ、と。（自然の中で、リラックサして自由にお互いに問答することによって、考えを深めていく）。そして、心ひそかにその筋道のあるところに感服していたのである。

僕は陽明学者ではない。しかし、友人同士のお互いの切磋（学問・技芸などを磨くこと）は、まさにこのようなものでなければならぬと思う。

⑤ だから、講義をしたり、協同で作業するのに、これまで一度も規則などは設けたことはない。そして、お互いの会話に諧謔や滑稽さを交えて、あたかも漢の匡稚圭きょうちけい（詩を説明するのが巧みで、人をよく笑わせた。聞いた人が笑いすぎて、あごがはずれた「詩を説いて人のあごを解く」と言われている）が詩を説くに当たってそうしたのと同じようにしてきたのである。

先ごろ、門人たちと米をつき、畑を耕したりしたのも、実はそのためだったのだ。

⑥ ところで、剣術と水泳の二つは、武技のうちでもっとも大切なものである。ちょうどいまは夏も盛りであり、また、わが国の周辺にはしきりと外国がうかがっており、その警備は一日たりともゆるがせにはできないのだ。ところが、そんなことは遊びごとだとして、実地の鍛練を重んじないで、いたずらに日を送り、学業を怠ることは、十分慎まねばならない。

⑦ 要するに、学んでその効果を挙げるには、まず気の合った仲間がお互いに心を通いあわせることが大切なのであり、そうすれば物事の正しい道筋はおのずから通るのである。それはこまごました札法や規則の遠く及ぶところではない。学ぼうとする者が自分自身で理解するところなくして、くどくどと言葉数のみ多いのは、聖人と賢人の戒めるところである。

だが、たまたまなか得るところがあつたにもかかわらず、沈黙して自分の中に固くとじこもろうとするのは、僕がたいへんきらいところである。

⑧ およそ読書というのはいかなる心構えですべきなのか。それは少なくともなにかを実行しようとするためではないのか。書物には昔のことが書かれている。だが、現実に行動するのは今なのである。その今と昔とは決して同じではない。とすれば、今やろうとすることと、本に書いてあることとは、ひとつひとつぴたりと一致するはずはない。

それが一致しなければ、当然いろいろな疑問や難問が生ず

るはずである。その疑問や難問を解き、自分で悟るには人によつて時機がある。そのため、その間にお互いに質問しあうことは、当然のことである。

⑨ だとすれば、固く沈黙して自分の殻にとじこもろうとする者は、自分では理解して、語るべきものがないのではなければ、相手を語るに足りないと考えている者なのである。

僕のためざす志はそんなところにはない。すでに語るべきなものもないのはやむをえないけれども、いやしくも語るべきことを心のうちにもっている者は、たとえ相手が牛馬の世話人であろうとも、まさに心を開いて語るべきなのである。ましてや、同友の場合にはなおさらである。

松陰は、「諸生に示す」において、学習効果を上げるためには、徹底して「心を通い合わせる」ことの重要性を説いている。そのために、礼法や規則を排し、沈黙して自分の内に閉じこめるのではなく、自由な雰囲気の中で語り合うべきだとしている。そのリラックスした環境を作り出すために、お互いの会話に、諧謔や滑稽さを交えるようにしてきたとささ述べている。この松陰の諸生に示している配慮が、松下村塾教育を実践してみても、その過程を振り返って到達した松陰の境地であったのである。

## 二 「松下村塾記」

ここでは、「松下村塾記」について、まず松陰自筆の本文を掲げ、次にその訓読、さらに大意について明らかにしたい。

(原文 吉田松陰関係資料九四 山口県文書館蔵)

松下村塾記 九月五日

長門之為國、僻在山陽之西陬、而萩城蔽連山之陰、當渤海之衝、其地背、海面山、卑濕隱暗、吉見氏之故墟、而古不甚顯、二百年來、乃為本藩治所、於是、山產海物、四方輻湊、嚴然為一都會矣、城之東郊、則吾松下邑也、松下之為邑、南帶大川、川之源、溪澗數十里、人莫能窮、蓋平氏遺民嘗所隱匿、其東北二山、大者為唐人山、朝鮮俘虜之所鈞陶也、小者為長添山、松倉伊賀之廢址也、伊賀嘗與大内氏將岩成豊後、數戰陣原、連為所敗、遂投大將淵而死、原與淵今皆存云、山川之間、人戶一千、士農在焉、工商在焉、昔時忿惋不平之氣、今則鬱然靄然、発為人物、煥乎為一勝區矣、然豈尋常怪、昔時忿惋不平之氣、流而為川、峙而為山、発則為人物、以成所謂一勝區者、固其常耳、苟自非起奇傑非常之人、奮発震動、轉乾撼坤、以成邦家之休美、將何以足一變山川之氣、平其忿惋乎哉、況萩城之隱暗不顯、亦已久矣、今則嚴然為一都會、是猶非眞顯者、特其機先兆耳、今松下在城之東方、東方為震震、萬物之所出、又有奮発震動之象、故吾謂、萩城之將大顯、其必始于松下邑也歟、」去年余免獄、家居松下、

不接外人、獨外叔久保先生、及諸從兄弟時々過訪、因共講究道藝、家嚴家叔與家兄、又從而獎勵之、吾族盛大、蓋將往奮發震動一邑也、初家叔先生之集徒教授也、扁其家塾曰松下村塾、家叔已為官、其号久廢、外叔已會邑子弟而教之沿用、其号頃命余記之、余曰、学、学所以為人也、塾係以村名、誠使一邑之人入則孝悌、出則忠信、則村名係焉而不辱、若或不能然不亦為一邑之辱乎、抑人之所最重者、君臣之義也、国之所最大者、華夷之辨也、今天下何如時也、君臣之義不講六百餘年、至近時、合華夷之辨而又失之、然而天下之人、方且安然為得計、生神州之地、蒙皇室之恩、内失君臣之義、外遺華夷之辨、則学之所以為人、人之所以為人、其安在哉、是二先生之所以痛心、而余不得不為之記、亦在于斯、噫外叔先生、誠能教誨一邑子弟、上明君臣之義華夷之辨、下又不失孝悌忠信、然後奇傑非常之人、起而從之、以一麥山川忿惋之氣、馴致邦家休美之盛、則萩城之旨真顯、將於是乎在、豈特一勝區一都會而已哉、果然則長門雖僻在西陬、其奮發天下、而震動四夷、亦未可量也、已余罪囚之餘、無足言者、然幸居族人之末、若其糾輯子弟、以繼二先生之後、則不敢不勉也、外叔先生曰、子言則大矣、吾不敢也、請問切于邑人者、余曰、古人有月旦之評、今且為子弟、設立三等、分為六科、各標其所居、月朔升降、以驗其勤惰、曰進德、曰專心、是為上等、曰勵精、曰修業、是為中等、曰怠惰、曰放縱、是為下等、三等六科、志之所趨、心之所安、無為而不可、誠使邑人皆

進為上等之選、則吾之前言、未必憂其大也、先生曰善、因併記、安政三年丙辰九月吉田矩方撰

(松陰による本文訂正は、訂正後の結果を記した)

(訓読)

松下村塾記 九月五日

長門の國たる、僻して山陽の西陬に在り。而して萩城は連山の陰を蔽ひ、渤海の衝に當る。其の地海を背にして山に面し、卑濕隱暗、吉見氏の故墟にして、古は甚だしくは顯はれず。二百年來、乃ち本藩の治所となる。ここに於てか、山産海物、四方より輻湊し、巖然として一都會となれり。城の東郊は則ち吾が松下邑なり。松下の邑たる、南に大川を帶ぶ。川の源は溪澗數十里、人能く窮むるなし。蓋し平氏の遺民嘗て隱匿せし所なり。其の東北の二山、大なる者は唐人山と爲し、朝鮮俘虜の鈞陶する所なり。小なる者は長添山と爲し、松倉伊賀の廢址なり。伊賀嘗て大内氏の將岩成豊後と、數々陣原に戦ひ、連りに敗るる所となり、遂に大將淵に投じて死す。原と淵と、今皆存すと云ふ。山川の間、人口一千、士農在り、工商在り。昔時の忿惋不平の氣、今は則ち鬱然靄然として、發して人物となり、煥乎として一勝區を爲せり。然れども吾れ常に怪しむ、昔時の忿惋不平の氣、流れて川となり、峙ちて山となり、發しては則ち人物となり、以て所謂一勝區を成す者は、固より其の常のみ。苟も奇傑非常の人を起し、奮發

震動して、乾を轉じ坤を撼かし、以て邦家の休美を成すに非ざるよりは、將た何を以てか山川の氣を一變して、其の忿惋を平かにするに足らんや。

況や萩城の隱暗にして顯はれざること、亦已に久しきをや。今は則ち嚴然として一都會たれども、是れ猶ほ眞に顯はるる者に非ず、特だ其の機の先兆のみ。今松下は城の東方にあり。東方を震と爲す。震は萬物の出づる所、又奮發震動の象あり。故に吾れ謂へらく、萩城の將に大いに顯はれんとするや、其れ必ず松下の邑より始まらんかと。

去年余獄を免され、松下に家居し、外人に接せず。獨り外叔久保先生及び諸從兄弟、時々過訪し、因つて共に道藝を講究す。家嚴・家叔と家兄と、又従つて之れを獎勵せらる。吾が族の盛大なる、蓋し將に往々一邑を奮發震動せんとするなり。初め家叔先生の徒を集めて教授せらるるや、其の家塾に扁して、松下村塾と曰ふ。家叔已に官となり、其の號久しく廢せり。外叔已にして邑の子弟を會して之れを教へ、其の號を沿用す。頃る余に命じて之れを記せしむ。

余曰く、「學は、人たる所以を學ぶなり。塾係くるに村名を以てす。誠に一邑の人をして、入りては則ち孝悌、出でては則ち忠信ならしめば、則ち村名これに係くるも辱ぢず。若し或は然る能はずんば、亦一邑の辱たらざらんや。抑々人の最も重しとする所のものは、君臣の義なり。國の最も大なりとする所のものは、華夷

の辨なり。今天下は何如なる時ぞや。君臣の義、講ぜざること六百餘年、近時に至りて、華夷の辨を合せて又之れを失ふ。然り而して天下の人、方且に安然として計を得たりと爲す。神州の地に生れ、皇室の恩を蒙り、内は君臣の義を失ひ、外は華夷の辨を遺れば、則ち學の學たる所以、人の人たる所以、其れ安くに在りや。是れ二先生の痛心せらるる所以にして、而して余の之れが記を爲らざるを得ざるも、亦ここにあり。噫、外叔先生、誠に能く一邑の子弟を教誨して、上は君臣の義、華夷の辨を明かにし、下は又孝悌忠信を失はず。然る後奇傑非常の人、起つて之れに従ひ、以て山川忿惋の氣を一變し、邦家休美の盛を馴致せば、則ち萩城の眞に顯はること、將にここに於てか在らんとす、豈に特に一勝區一都會のみならんや。果して然らば、則ち長門は僻して西陬に在りと雖も、其の天下を奮發して、四夷を震動するも、亦未だ量るべからざるのみ。余は罪囚の餘、言ふに足る者なし。然れども幸に族人の末に居れり。其の、子弟を糾輯して、以て二先生の後を繼ぐがごとくんば、則ち敢へて勉めずんばあらざるなり」と。外叔先生曰く、「子の言は則ち大なり、吾れ敢へてせざるなり。請ふ邑人に切なるものを聞かん」と。余曰く、「古人月旦の評あり。今且く子弟の爲めに三等を設立し、分つて六科と爲し、各々其の居る所を標し、月朔に升降して以て其の勤惰を驗せん。曰く進德、曰く専心、是れを上等と爲す。曰く勵精、曰く修業、是れを中等と爲す。曰く怠惰、曰く放縱、是れを下等と爲す。三

等六科、志の趨く所、心の安んずる所、爲して可ならざるなし。誠に邑人をして皆進みて上等の選たらしめば、則ち吾れの前言未だ必ずしも其の大を憂へざるなり」と。先生曰く、「善し」と。因つて併せ記す。安政三年丙辰九月、吉田矩方撰す。

〔参考〕「松下村塾記」「丙辰幽室文稿」所収、『吉田松陰全集』第二卷（大和書房、一九七三年、四三四～四三七頁）。

（大意）

松下村塾記 九月五日（安政三年）

- ① 長門の国は、山陽の西のはて、辺鄙な所にある。そして萩城は、中国山地の北にあり、大陸に対しては要衝の地である。こゝは日本海を背にして山に面し、低湿であるため曇りがちである。古くは、石見の国の吉見氏がこの萩に居館を構えた所で、昔から歴史の表舞台に上がることはなかった。この地に萩城が築かれてから二百年、今は長州藩政府の所在地である。ここにおいて、山や海の産物が四方から集まり、巖然たる一都會となつてゐる。そして、萩城の東の外れにあるのが、我が松下村（松本村）である。（松本村の地理・歴史の説明 省略）
- ② 萩城、つまり長州藩が表に出なくなつてから随分と時間が過ぎた。しかし、これは本当の姿ではない。これから起こりうる大きな動きの前兆に過ぎない。東のことを中国では「震」といい、震は「すべてのものが生まれる所」という。東は、震い

動かすものの象徴である。萩城、いわゆる長州藩が大きな活動をする時には、その人材は、必ずこの松本村より出るだろう。

- ③ 昨年、私は野山獄から出ることを許され、松本村の実家において、外の人には会つていない。母方の叔父久保五郎左衛門先生と諸従兄弟たちが時々訪れてくれるので、共に道徳や学芸を講究している。父杉百合之助、叔父玉木文之進、兄杉梅太郎もまた、これを奨励される。私の一族の盛んなことは、まさにゆくゆくこの小さな村を震い動かそうとしていることである。はじめ玉木文之進先生は生徒を集めて教授すると、塾の名前を「松下村塾」とし、入り口に札を掲げた。その叔父は、すでに官職に就き、塾の名前を久しく使っていない。久保五郎左衛門先生は、村の子供達を集めて教え、松下村塾の名前をそのまま受け継いだ。このごろ私に命じて、塾記を記させた。
- ④ 私はこう思う。「学ぶこと」とは、「人間とは何かを学ぶこと」である。塾に掲げるのに村名を以てする。誠にこの松本村の人々が、家では父母に孝を尽くし、年長者によく仕え、また外では、主君に忠義を尽くし、他人に信義を尽くせるならば、塾名に村に名前を掲げても、何ら恥じることはない。もしそうでないなら、一村の恥となるであらう。

- ⑤ そもそも人として最も重んずべきことは、君主と臣下の間で守るべき正しい道（君臣の義）である。また、国において最も大切なことは、日本と外国との違いを明確にすること（華夷



の弁である。今の日本はどうであろうか。君臣の義は、鎌倉幕府から六百年もの間、論じられていないし、近年は華夷の弁も失っている。そうして天下の人は、今やきちんとした計画ができていないと満足している。日本に生まれ、皇室の恩を蒙り、内に対しては君臣の義を失い、外に対しては華夷の弁を忘れるならば、学ぶことの本当の意味や、人が人としてある所以はどこにあるか。これが玉木文之進先生、久保五郎左衛門先生、二人の先生の心を痛められたところであり、私がこの松下村塾記を作らざるを得なかったのは、こういう理由があるからである。

⑥ 久保五郎左衛門先生は、誠によく一村の子弟を教え諭して、上は、君臣の義、華夷の弁を明らかにし、下は、父母に孝を尽くし、年長者によく仕え、主君に忠義を尽くし、他人に信義を尽くすことだと言われた。しかる後、優れた人が起ち上がり、この山や川に残る憤りや恨みの気を変え、我が長州藩を徐々に立派なものにする、つまり萩城を真の姿にするのはここ松本村からとしたい。単に立派で優れた場所や都会からだけではいけないのである。そうであるならば、長門は西の端にあるとはいえず、日本を奮い起こし、四方の異民族を震い動かすことができる。私は、罪を犯し囚われの身であるが、幸いに一族と共にある。子弟を集めて、二人の先生の後を継ぐためには、進んで努力をしなければならぬ。

⑦ 久保五郎左衛門先生は「お前の言うことが大きすぎて、私だったらそこまでほしくない。まず、松本村の人に今、何が必要かを聞く」という。

私は答えた。「中国後漢時代の故事によると、毎月の第一日に、人物を評価したという。それに倣い、私も生徒のために三等を設立し、その中を更に二つに分けて六科にする。そこで、生徒に自分がどの場所にいるかを示し、毎月第一日目に人物評価の上げ下げをして、勤勉か怠惰かを調べよう。進徳、専心、これを上等とする。励精、修業、これを中等とする。怠惰、放縱、これを下等とする。この三等六科は、志のおもむくところであり、心の安んずる所である。実行できないことはない。松本村の人々が進んで、お互いに上等等と評価するようになれば良い。私は、この松下村塾記の初めに、長州に何か起こる前触れがあるとすれば、この松下村塾のある松本村から始まるだろうと書いたが、皆が互いに進もうとするなら、これは必ずしも大したことではない。すると、久保先生は「よろしい」と言われた。従ってこれも合わせ記しておく。

安政三年丙辰九月 吉田矩方選す。

「松下村塾記」では、教育の使命を、君臣の義をわきまえ、華夷の弁を明らかにした人を育成するという高い理想を述べている。その教育方法は、三等六科のカリキュラムを厳密に定め、月

且の評によつて等級の上げ下げを計画している。

このことは、「諸生に示す」の自由な自主性を尊重する教育方法とは大いに異なるものである。

松下村塾で実際に学んだ渡辺蒿蔵は、村塾の実態について、次のように回想している。<sup>(5)</sup>

①松下村塾記にある等級別は行はれしや。(渡辺)何もなかった。  
②日課時間は定まりしや。(渡辺)きまつて居ない。登塾すれば、次から次へ待つて居つて居つて、讀んで貰ひ教へて頂いた。<sup>(ママ)</sup>

③學課目及び教科書。(渡辺)別に課目と云つてはない。教科書も皆別々で、自分は明史や東坡策などを教はつた。然し偶然同じものをやる人もある。それは居合せれば一緒にやつて貰ふ。  
④村塾の規則を見られたりしや。(渡辺)見た事はなかつた。<sup>(6)</sup>

⑤塾内の礼儀作法について。(渡辺)登塾退塾の時、ちよいと先生にお辞儀をするだけで極めて簡單、同僚には別に礼はしなかつた。

このように渡辺は、「松下村塾記」にある等級別は行われていなかったと明言しており、塾記のカリキュラムは、塾を開始する前の計画のみであったことが判明する。その他、塾の規則は無かつたこと、礼儀作法も極めて簡略であつたことを渡辺は回想しており、「諸生に示す」で松陰が述べていることが、松下村塾の実態であつたことが確認できる。教育は、実践過程を経ることに

よつて、常に変化していく営みである。松陰も教育実践の前は、「松下村塾記」のような理想を掲げたが、実践の過程で、心の通い合いを重視するようになり、その結果、「諸生に示す」のような境地に到達したと考えられよう。

### 三 「学校を議す 付、作場」

松陰の教育論には、学校の振興策を論じた「学校を議す 付、作場」がある。次にこれを分析することにより、その教育論に通底するものを探りたい。

まず松陰自筆の「学校を議す 付、作場」の原文を掲げ、次にその訓読、さらに大意について明らかにしたい。

(原文) (囚室雜議)<sup>(7)</sup>所収「議学校 付作場」 吉田松陰関係資料 一四五 山口県文書館蔵。「戊午幽室文稿」所収の「論学校 付作場」<sup>(8)</sup>は、他筆なので、松陰自筆本とは若干の差違がある。そもそもタイトルも松陰は「論学校 付作場」から「議学校 付作場」に訂正している。これからは原文に従つて、表題を「学校を議す」に修正すべきである。

#### 議学校 付作場

聚人材、振國勢、爲今日要務、而人材一聚、則國勢不期振而振矣、聚人材、莫如隨其器而叙用之、然徒聞其名而用之、不當而

捨之、適足招人誘而墜国勢、不可不慎也、故余有二策焉、一曰、奮學校、二曰、起作場、今學校雖設、不至大奮、余謂大令國中、募學問行義可爲人師表者、志氣材能可學而造焉者、其他兵農曆算、天文地理、諸種學藝、自挾所長者、不拘貴賤、不問淺深、皆得充學生、學生分科、各學其所學、不縛以繩墨、唯視其成德達材與否而黜陟之、宋程顥所議尊賢堂〔置有德者〕、〔〕は割注の記号〕觀國法〔置有材者〕、○無此二法、學校爲少年誦誦場、而不足以聚人材也〕胡瑗所設絳義齋〔所以成德〕治事齋〔所以達材〕、○無此二齋、學校蘇軾所謂、黃茅白葦、王氏之同也〕其於師道學制、並得其宜矣、果能師二賢之意、遷諸今學校、學校其有不奮者乎、礼、天子太子、入學齒讓、今以學校、爲門地資格之場、且學校將待天下人士、何必吾二國、今陪臣足輕二國之民、猶且不得入學焉、其爲規模、豈非可嘆之甚乎、讀書之士、率多空疎、齊稜下可鑑也、故余謂、不若起作場連接之學校也、船匠銅工製藥治革之工、凡有寸技尺能者、要皆宜屬治事齋、今湊聚諸作場、合衆知、廣巧思、講究船艦器械、必有所成矣、今非無寸技尺能、然樸楸絲粟、不能自奮、或有良工師、其徒不衆、無以成事矣、今學生已不問貴賤淺深、得入學焉、若乃呆然誦誦、無甚補于事、余謂、以時驅之工作、顧亦一益也、今世學生、固已空疎、不解事務、工匠愚朴、不知要需、二者分爲鴻溝、忽聞余學校作場之說、必愕以爲異矣、然吾固謂、募材能、充學生、學生非向空疎徒矣、且作場、非必有大作于其中也、工作有學〔吾

師象山曰、學必有事、非徒誦空文玩空理而已、如學書學劍、可見矣、故其礮術、自稱曰礮學、亦抑空文空理、熟諸實事之微意也、所謂、工作之學、亦是物也、〕連之學生、是爲兩便焉耳、嗚呼、今日之務、在聚人材、人材已衆、置之學校作場、然後料其人材材能、隨宜叙用之、有諫官焉、有治臣焉、軍防備矣、民政挙矣、一器一藝、具得其妙矣、如是而國勢不振者、未之有也、

〔訓読〕

「學校を議す 附、作場」

人材を聚め、國勢を振ふは、今日の要務たり。而して人材一たび聚まらば、則ち國勢振ふを期せずして振はん。人材を聚むるは、其の器に随つて之れを叙用するに如くはなし。然れども徒らに其の名を聞きて之れを用ひ、当らずして之れを捨つれば、適々人の誇りを招き國勢、墜すに足る。慎まざるべからざるなり。故に余に二策あり。一に曰く、學校を奮はす。二に曰く、作場を起す。

今學校を設くと雖も、大いに奮ふに至らず。余謂へらく、大いに國中に令し、學問行義、人の師表たるべき者、志氣材能の學びて造るべき者、其の他兵・農・曆算、天文、地理、諸種の學芸、自ら長とする所を挾ける者を募り、貴賤に拘らず、淺深を問はず、皆學生に充つるを得しむ。學生は科を分ち、各々其の學ぶ所を學び、縛するに繩墨を以てせず。唯だ其の德を成し、材を達する

と否とを視て、之れを黜陟す。

宋の程顥（10）議する所、尊賢堂（有徳者を置く）・觀国法（有才者を置く）。○此の二法なくんば、学校は少年の講誦（11）の場となる。而して以て人材を聚むるに足らざるなり、胡瑗（12）設くる所の經義齋

（徳を成す所以）、治事齋（材を達する所以）。○此の二齋無くんば、学校は蘇軾の所謂、黄茅・白葦、王氏の同なり）は、其の師道学制に於けるや、並びに其の宜しきを得たり。果して能く二賢の意を師として、これを今の学校に遷（13）さば、学校其れ奮はざるものあらんや。

礼に、「天子の太子、学に入らば齒に讓る」と。今は学校を以て、門地資格の場と為す。且つ学校は將に天下の人士を待たんとす。何ぞ必ずしも吾が二国のみならんや。今陪臣・足輕、二国の民、猶ほ且つ入学するを得ず。其の規模たる、豈に嘆くべきの甚だしきに非ずや。

読書の士、率ね空疎多し、齊の稷下（14） 鑿（15）みるべきなり。故に余謂へらく、作場を起こし之れを学校に連接するに若かざるなりと。船匠・銅工・製薬・治革の工、凡そ寸技尺能ある者、要は皆宜しく治事齋に属すべし。今これを作場に湊聚し、衆知を合せ巧思を広め、船艦器械を講究せば、必ず成る所あらん。

今は寸技尺能無きに非ず。然れども樸櫨・絲粟（16）、自ら奮ふ能はず。或は良工師あるも、其の徒衆からず、以て事を成すなし。今学生已に貴賤淺深を問はず、入学するを得るとも、若し乃ち呆

然誦読せば、甚だしくは事に補ふことなし。

余謂へらく、時を以て之れを工作に駆るも、顧ふに亦一益なりと。今世学生は、固より已に空疎にして、事務を解せず、工匠は愚朴にして、要需を知らず。二者分れて鴻溝を為す。忽ち余の学校作場の説を聞かば、必ず愕（17）きて以て異と為さん。

然れども吾れ固より謂へらく、材能を募りて、学生に充つれば、学生は向の空疎の徒に非ず。且つ作場は、必ずしも大いに其の中に作ることに非ざるなり。工作には学あり、（吾が師象山曰く、「学必ず事あり、徒らに空文を誦し、空理を玩ぶのみに非ず。書を学び劍を学ぶが如き、以て見るべし」と。故に其の砲術、自ら称して砲学と曰ふも、亦空文空理を抑へて、これを實事に熟するの微意なり。所謂工作の学も亦是の物なり、之れを学生に連ぬれば、是れ兩便と為すのみ。

嗚呼、今日の務めは、人材を聚むるに在り。人材已に聚まらば、之れを学校・作場に置く。然る後其の実材実能を料り、宜しきに従つて之れを叙用せば、諫官あり、治臣あり、軍防備はり、民政挙る、一器一芸、具さに其の妙を得ん。是くの如くにして国勢の振はざるもの、未だ之れあらざるなり。

（大意）

① 人材を集めて、藩の勢を振り立たせるのは、今日の要務である。そして人材が一たび集まるならば、国勢が振うことは期せ

ずして振うだろう。人材を集めるには、その器に従ってこれを任用するのがよい。

② 私には二策がある。一つは、学校を盛んにする。二つめは、作場さくばを設置することである。

③ 今藩校を設けていても、大いに盛んになっているとはいえない。そこで私は次のように考える。広く藩内に命令し、学問や行儀が人の模範となる者、志気や才能が学んで到達しえる者、そのほか兵学、農学、曆学と算術、天文学、地理学など諸種の学芸が優れている者を募り、身分の高低にかかわらず、学問の浅深を問わず、全員が学生になることが出来るようになる。学生は科目を分かち、おのおのその学びたい所を学び、規則で束縛せず、ただその徳を成し、才能が目標に達成するかどうかを見極めて、降格したり昇進したりすべきである。

④ 宋の程顥ていけんが議する所の尊賢堂（有徳者を置く）・観国法（有才者を置く）。○此の二法がなければ、学校は少年の講誦こうしやうの場となる。そのため人材を集めるに足らなくなる。胡瑗こえんが設ける所の經義齋（徳を成す所以）、治事齋（材を達する所以）。○此の二齋が無ければ、学校は蘇軾のいわゆる、黄茅こうぼう・白葦はくいのように一色になると、王安石を批判したのと同じようになる。は、その師道学制におけるや、その宜しきを得ている。よく程顥・胡瑗の二賢の意を師として、これを今の学校に移すならば、学校は奮わないものはない。

⑤ 『礼記らいぎ』に、「天子の太子が、学校に入れば、年齢の順序に従う」とある。今の藩校は、身分制による順序があり、資格の場となってしまっている。かつ学校はまさに天下の人材を待とうとしている。それは必ずしも長門・周防の二国のみではない。今、陪臣、足輕、二国の民は、藩校に入学することができない。それは大変嘆かわしい。

⑥ 読書の士は、おおむね空疎の人が多い。そこで私は、作場を起こし、これを学校に連接するのが良いと思う。船匠・銅工・製薬・治革の工など、およそ少しでも技能のある者は、才能を達成するようにすべきである。今これを作場に集め、衆知を合わせ、巧みな考えを広め、船艦・器械について講究すれば、必ず達成できるであろう。

⑦ 今は、少しの技能を持つ者がいないわけではない。しかし、自ら奮うことができない。あるいは良工の師はいるが、その徒は多くない。したがって事を成すことができない。

⑧ 学生がすでに身分の高低や学問の浅深を問わないで入学することが出来たとしても、もしほんやりと声を出して字句を読むだけなら、たいして欠点を補うことは出来ない。

⑨ そこで私は次のように思う。時に応じて仕事をやらせるのも、一つの益である。今の世の学生は、もとよりすでに空疎であって、実務を理解しない。一方で、工匠は素朴であって、用途に従って用いることを知らない。二者は分れて大きな溝が

来ている。そこで私の学校に作場を併設する説を聞くと、必ず驚いて異とするであろう。

⑩ しかし私は固く次のように思う。才能のある者を募って、学生にすれば、学生はもともと空疎の徒ではない。かつ作場は、必ずしも学校の中にするだけでない。工作には学がある。これを学生に及ぼせば、両方の便利となる。

⑪ 今日の務めは、人材を集めることにある。人材がすでに集まれば、これを学校・作場に置く。その後、その実際の才能や能力を測定し、それに従って採用すれば、主君を諫める官吏や、政治を司る臣下ができ、軍防が備わり、民政が上がる。一器一芸が、完全にその巧みなことを發揮することができる。このようにすれば藩勢は必ず振興するであろう。

松陰は、学生は科目を分かち、おのおのその学びたい所を学び、規則で束縛せず、ただその徳を成し、才能が目標に達成するかどうかを見て、降格したり昇進したりすべきであるとしており、学生は自主的に学び、規則で束縛せずに、自発性を引き出すことを目指している。そして学校に作場を併設することも、船匠・銅工・製薬・治革の工など、少しでも技能のある者は、才能を達成するようにすべきであるとしている。

なお、松陰の学校に作場を併設すべきとする論は、単に技術を習得する場を設けるという意味だけではなく、学生が空理空論

に陥るのを防ぐという教育の本質論から提起されている。西洋教育史において、アメリカのジョン・デューイが、授業の中に実習を導入することによって、それまでの暗記主義の教育に革命をもたらしたのと同じ発想に立っている。デューイのシカゴ大学附属実験学校の実験授業より四〇年早い。工作には学問体系があるととして、当時の技術伝習を低くみる考え方を改めるべきだとしている。

学問と工学が接続すれば、双方に便宜があるとし、育成した実際の才能・能力をはかり、それに従って人材を登用すれば藩勢が振起するとしている。有志による実力主義の発想が底を貫いている。松陰の工学教育論は、人々はこれを聞いても驚いて異とするだろうと本人も懸念しているように、当時は理解されなかった。しかし、明治期になって工学教育は、大学の中で、一つの学部として位置づけられ、実現していくことになる。

### むすび

以上、「諸生に示す」・「松下村塾記」・「学校を議す 付、作場」について分析し、相互に比較検討した。その結果、松下村塾の実態は、「松下村塾記」のようなカリキュラムを設定するものではなく、「諸生に示す」のような規則を設けず、自由に学びを追究しようとするものであり、松陰は心の通い合う教育を求めていることが判明した。このことは「学校を議す 付、作場」にも

通底しており、学生は自主的に学び、規則で束縛せず、自発性を引き出すことを目指している。要するに、松陰の教育論は、自発性を引き出すことを原点としているといえるのである。

注

- (1) 代表的なものとして、古くは玖村敏雄『吉田松陰』（岩波書店、一九三六年）二二六頁。
- (2) 谷三山の最新の研究については、谷山正道「幕末の社会情勢と地域社会人―大和の碩学谷三山の言説と門人たち―」（同氏『民衆運動からみる幕末維新』所収、清文堂出版、二〇一七年）参照。
- (3) 松陰は山水泉石など自然の中で子弟を啓発する教育方法を王陽明から学んでいるが、個性教育についても王陽明から影響を受けていることが推測される。「伝習録序」の最初には、「聖賢の人を教ふるは、医の薬を用ふるがごとし。皆な病に因つて方を立て、その虚実・温涼・陰陽・内外を酌みて、時時にこれを加減す（『王陽明全集 第一巻』明德出版社、一九八三年、五六頁）」とあり、教育は医者が薬を用いるように、徹底して個性に応じなければならぬとしている。松陰は当然この部分は読んでいないはずであるから、その個性教育について影響を受けていることが考えられる。
- (4) 匡稚圭は、「匡説詩、解人頤（『漢書』）」と、詩を説いて、人

の頤を解いたと言われているほど、面白おかしく詩を説明することに巧みであった。

- (5) 「渡辺嵩蔵問答録」（『吉田松陰全集』第一〇巻、大和書房、一九七四年、三五九～三六二頁）。
- (6) 松陰自筆の「規則」（『吉田松陰全集』第一〇巻、大和書房、一九七四年、二九二～二九三頁）が残っているが、渡辺の回想から考えて、これは松下村塾のものではなく、他の目的で書かれたものであろう。
- (7) 「囚室雜議」は安政五年六月、長州藩主毛利敬親から、所見を述べることを許されたことに感激して見解をまとめたものであり、松陰にとって非常に重い意味をもった論策である。第一条は、長府・徳山・清末の三末家および岩国と和することを議す。第二条は、半知を復することを議す。第三条は、「学校を議す。付、作場」であり、学校の振興策を議している。
- (8) 『吉田松陰全集』第四巻（岩波書店、一九三四年）七六～七七頁。
- (9) 工作場。作場は本来、農作物を作る所の意味であるが、ここでは工作場のこと。
- (10) 中国、北宋の儒者（一〇三三～一〇八五）。心性の学を説き、心性本来の姿に応じた修養論を唱えた。のち、朱子の学に影響を与えた。
- (11) 観光法の誤りか。観光は国の威光を見る意味で、国の文物

や礼制を観察すること。

(12) 中国、北宋の儒者（九九三～一〇五九）。長く教育にたずさわわり、後には湖州の教授となる。才能の高下に応じて、六経、武事、水利、暦算などの技術を学ばせた。著書に『周易口義』、『洪範口義』等がある。

(13) 黄茅は黄色のちがや。白葦は白色のあし。この二つのたとえは、蘇軾が王安石（北宋の政治家、文人。「新法」を強行し、功利を第一とした）を「張文潛に答ふる書」において非難した言葉。良い土地ならば種々の植物が生じるが、荒地では見渡す限り黄色の茅ちがやや白色の葦あしの一色になる。これは、王氏（王安石）が、自説によって学問の統一をはかったのと同様である、の意。

(14) 年齢。「天子の太子学に入らば齒もて譲る」は、学校での序列は身分の尊卑によらず、長幼の序（年齢順）による意。

(15) 稷は中国の戦国時代の斉の都臨淄りんしの城門の名。斉の宣王は、文学遊説の士を優遇したので、多くの学者がこの地に集まり、討論した。世にこれを「稷下の学」という。

(16) 樸ぼくそくは小木の名。絲粟はともに微細なもの。いずれも才能の劣った者のたとえ。